6月反安保闘争の終焉 6・23

全国全共闘のセクト野合を越え
全共闘運動の原点へ
たとえ権力の壁は厚くとも

火炎ビンが投げられ装甲車が燃えあがった

闘いはやまず

二十三日、その前日「日米安全保障条約」はその固定期限がきれた。そしてこの日から〈国民〉の意志をえまったく無視した形で、三〇二議席という数にのみ依拠した佐藤内閣によって自動延長された。

この日、全国全共闘、全国反戦共催による「六・二三労学市民大統一集会」が明治公園で開かれた。三時頃からつめかけた学生、旗の波は次第に広がり、反戦労働者がつめかける頃、公園の中は身動きできないほど埋めつくされた。その中で、権力との直接対峙をよそに、戦旗対反旗、ML対フロントなどの内ゲバがありながらも、七時頃、約五万人の参加者を結集し、統一集会は成田空港三里塚反対同盟青行隊長の「反安保体制、階級闘争」へむけたアピールから開始された。

六八、六九年にわたって全国的に展開された学園闘争は、七〇年に至って強権的な大学当局によってあらゆる闘争は締め出され、大学当局のいう〈一般学生〉さえもが行く場を失なった。この日も、多くのノンヘル、ノンセクトの学生もつめかけたのだが、全国全共闘のアピールはこれまでの各大学代表のアピールという慣例を破って各セクトのアピールに終った。これは全国全共闘がセクトの野合でしかなかったことを、計らずも露呈してしまった。このことほど大きく問題にされねばならない。

今野反戦青年委世話人の決意表明採択を最後に集会を終えたデモ隊は、街頭へ繰り出した。先の十四日、鉄パイプで武装登場したMLはこの日鉄パイプにかわって竹竿の武装で参加していたのだが、青山絵画館前付近で機動隊と対峙する頃には、片手に鉄パイプもう一方の手には火炎ビンで武装されていた。その数二〇〇人ほどろうか。限北線を張る機動隊に一斉に火炎ビン攻撃、退却する機動隊退却から攻撃。鉄パイプで応戦するデモ隊、攻撃から退却。水平撃ちのガス銃が連続花火のように火を吹き、鈍い音が響く。

まもなく、わずかに衝突の跡をとどめるだけの場所を何事もなかったかのように後ろから後から機動隊を呪わせるデモ隊。ゆるところで小ぜりあいが続き、そして衝突の跡は生々しく残されていった。その中でケガをした学生の手当をする、白ダスキに黒くかかる頃、装甲車は機動隊を呪わせるデモ隊。

「六・二三救援会」と染めぬいた三〇、四〇才ぐらいの〝オバサン連〟の姿が脳裏にやきついた。

デモ隊が国会の南通用門をさしられ、ビデオ車から伸びたカメラがその中から顔をのぞかせ、サーチライトがまぶしくデモ隊の姿を浮びあがらせる。遠くに国会議事堂が無表情に見えるだけ。「安保粉砕・闘争勝利」のシュプレヒコールが一層高く、デモ隊の装甲車を蹴る鈍い音だけが響きわたった。

唯一の安保スト

その頃、一日以来「連日デモ」を敢行してきた〈平連〉は、この日も清水谷公園に結集した。その数一万五千人（主催者発表）にのぼり、デモが出発した後、さらに二万人の追加発表がなされるという、まさに前代未聞の〝異常〟事態となった。

一方月安保ゼネストを掲げた総評は二日頃に至り、当初のゼネストを放棄し、五月一日のメーデーにいたっては、同盟の右翼的分裂作動におびえ「統一集会」という〝唯一の安保スト〟を放棄した。

うなんら闘争に値するものをも守るため「反安保」のスローガンさえ下した。そうした官僚労組を乗り越えて、この日の早朝、動力車労組の労働者によって〝安保スト〟が革マル派の学生の支援による「労学共闘」によって強行取られていたが、そうしたこともそこに、代々木公園では共の「一日共闘」などというまことに形ばかりの、「中央大集会」が二三万人（主催者発表）を集めて〝アコーディオンへ調べ〟にのって行なわれたのである。

衝突・討論

全国全共闘が〝連帯〟のデモの解散地点日比谷公園の入口ではデモが到着するごとにデモ隊と機動隊の激しい衝突が繰り返されていた。入口付近は催涙ガスが充満し、見境なく襲ってくる。デモ隊は退却する機動隊員一人を捕まえた。「ヤレヤレ」と叫ぶ者。「ヤメロ、ヤメロ」と叫ぶ者。いつも抑圧され、弾圧され屈辱を強いられているのだが……。「ヤメロ」と言った学生のだろうか、気を失なった機動隊員を大勢に乗せて機動隊の待機するところまで運んでいった。それから間もなく、機動隊は公園内までガス銃を撃ち、引入してきた。公園の中までも機動隊の解放区に化してしまった。

催涙ガスの炸裂する中で、近くにガス銃の連続音と機動隊のウナリ声を聞きながら、まだ集会を続行する黒ヘルの部隊があった。まわりには散り散りになった仲間を捜す姿が、チラホラ見えるだけ。〝自由連合〟と書かれた黒旗を囲む黒ヘルの部隊は終息近くまで、一人、一人の発言を求めながら結集会を続けていた。

日比谷公園にデモ隊の姿がなくなった頃、平連のデモ隊は、全国全共闘、全国反戦のデモ隊と交流して分断されたため最後尾ほどデモを続けていたのであった。

そのデモが終着点につく頃には、すでに機動隊はなく、はからずも徹夜デモンストレーションとなった。

六・二三がろうと、〝安保〟だろうと、変わることなく続く銀座のネオン街に、喪が生じたのであった。〝金と権威〟の街夜の銀座は、金もなく名もない若者の夜の街となったのであった。

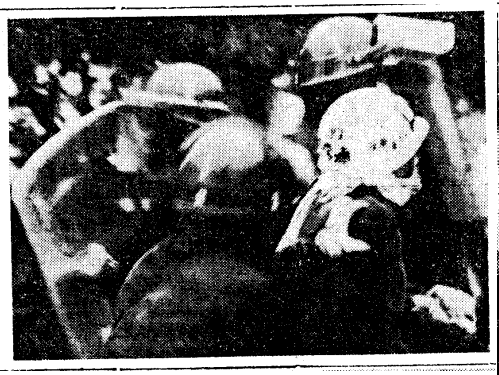
七〇年代闘争へ

こうして六月二十三日は終わった。そして七〇年の六月は終わろうとしている。この日を最後に六月には大きな街頭闘争はもちないだろう。だが、まだ平連の「連日デモ」は続く、いつまで続くのか。〈平連の運動自体にはそれなりの問題点なり、限界性はあるのだが、しかし、ユニークな運動は否定しがたく、とどまるところを知らない。

七〇年六月が終わっても、「安保体制」は依然として変わりなく存在し、ますます重くのしかかってくるであろう。街頭へ、街頭へと出てきた学生も、労働者も、学園へ、職場へ戻って行く、学園ではこれまでの学園闘争で掲起された問題はなんら解決されることなく存在し、それ以上に、ロックアウト体制なるものをもって、闘争を圧殺せんとしている。職場においても合理化攻勢はとどまることはないであろう。権力の壁はあつくあまりに強大ではあるが、それだからこそ一層、今、それぞれの学園で、職場で、地域で根底的な闘いを、個人の〝主体性〟と〝自発性〟の中から創出していかねばならない。

全国全共闘がセクトの野合でしかなかったことを露呈してしまった現在、日大・東大闘争によって創出された、「全共闘運動」そのものを再度見つめ直す中でしか、七〇年六月を七〇年代闘争の出発点とすることはできないのではないか。

この日はこれまで叫ばれてきた「労学共闘」が実質的に動力車労組において実現された。こうした「労学共闘」、そして三里塚における「労農学共闘」もすでに実現されている。こうした闘いの環をさらに押し進めることによって、七〇年代闘争の展望も開けてくるのではないか。



この日も二〇〇人以上が逮捕された

明治公園の集会には本学寮闘委の旗も…